

こどもの
世界文学

パイル, ハワード

こどもの世界文学 7 神宮輝夫 ほか 編集

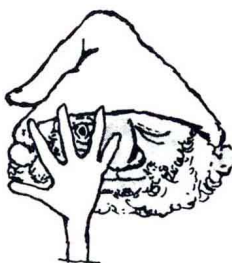
ふしぎなふしぎな時計

講談社 1972

238p 24cm

内容: とんちにまけた三悪人 やくそくのなぞなぞ
わたりがらすとこがねひめ おめぐみのむだづかい 三
びきのこぶたと人食いおに ほか4編

ハワード=パイル



こどもの世界文学7

ふしぎなふしぎな時計^{とけい}

昭和47年9月16日 第1刷発行

定価 750円

作者 ハワード=パイル

訳者 清水真砂子^{しみず まさこ}

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

郵便番号112 振替東京3930

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

8397-170071-2253 (0) (児1)

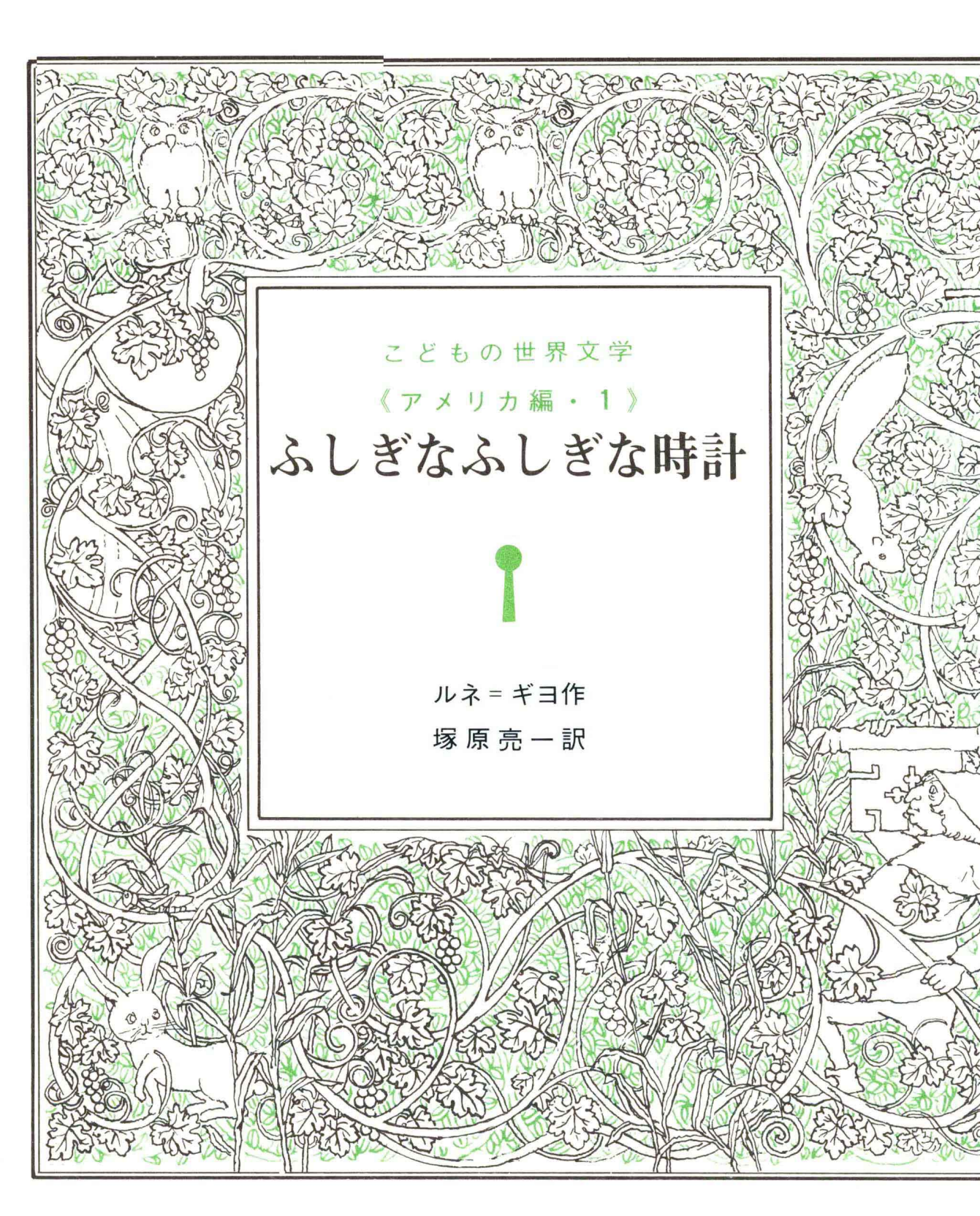




ミシガン州イーストラランシングの町（アメリカ）







こどもの世界文学

《アメリカ編・1》

ふしぎなふしぎな時計



ルネ = ギヨ作

塚原亮一訳

もくじ

とんちにまけた三悪人 ^{あくじん}	10
やくそくのなぞなぞ.....	37
わたりがらすとこがねひめ.....	61
おめぐみのむだづかい.....	89
三びきのこぶたと人食 ^{ひとく} いおに.....	111
クラウスとまぼうのつえ.....	127
見 ^み すぎてそんをしたはなし.....	150
グリッグズさんといたずら小おに.....	173
うすのろブーツ、王 ^{わう} さまをだます.....	191



物語を読んだあとで

さし絵もかいたパイルおむさん

清水真砂子……212

タレク・オルフセイン……216

ニクソン大統領とあくしゅ

218

世界の妖精物語

神宮輝夫……218

「とんちにまけた三悪人」の読書会から

北川幸比古……221

おかあさんのためのアメリカ児童文学史①

清水真砂子……228

訳者・画家の横顔……234



《責任編集》

神宮輝夫

関楠生

安藤美紀夫

塚原亮一

(日本編)
鳥越信

装本 大橋 正

扉 安野光雅

さしえ 生悦住喜由

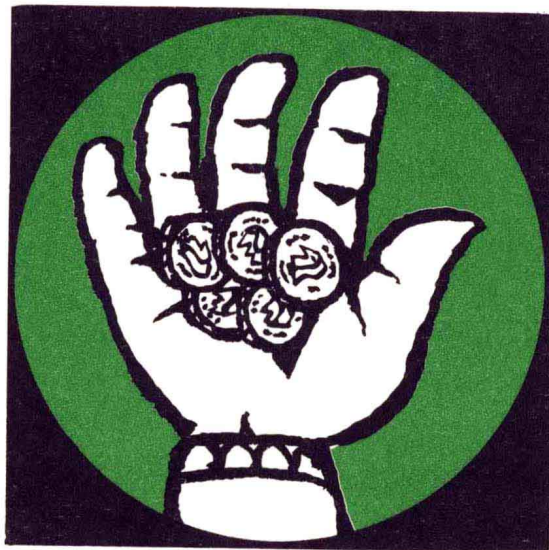
扉写真 正井泰夫

ふしぎなふしぎな時計

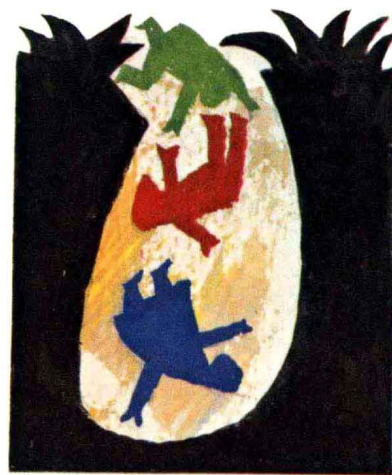
ハワード＝パイル作

清水真砂子訳

生悦住喜由絵



とんちにまけた三悪人^{あくにん}



むかし、あるところに、ひとりの男^{おとこ}がすんでいました。名^なまえはジェイコブ、ただそれだけ。このジェイコブだんなの財産^{ざいさん}といえは、まるまるふとったぶた一頭^{いっとう}に黒やぎ二頭^{にとう}、それからおかみさんと、持^もって生まれた陽気^{ようき}な気^きだてだけでしたが、この陽気^{ようき}な気^きだてこそ、だれにもまけない財産^{ざいさん}でした。

「なあ、おい。」ある日^ひのこと、ジェイコブだんなはおかみさんにいいました。「あしたあたり、あのぶたを市場^{いちば}に追^おってって売^うろうと思うんだ。ちっとはもうけがあるかもしれないで。」

「そうなさいましたな。」



おかみさんはいいました。おかみさんもいい人で、だんなさんのいうことには、ついで、さからったことがありませんでした。

ところで、おかひとつこえたむこうの町には三人の悪人がぜいたくのかぎりをつくしてくらしていました。ひとりは牧師、ひとりは警察署長、あとのひとりは町長でした。だれがいちばんの悪人かって？ それはむずかしい。でもひよっとしたら、牧師あたりだったかもしれません。

「ちよっと、ちよっと。耳よりな話ですよ。」牧師はほかのふたりにいいました。「ほら、おかのむこうにすnderあのジェイコブが、ふとたぶたをあした市場までつれてくることになってるんです。ひとつ、どうです、うまいこと、だましてみませんか。もちろんえものは山分けです。そうすりや、一銭もはらわなくなつて、だいどころにやベーコンの大きなかたまりが一つや二つころがりこんでくるし、えんとつにや、ソーセージがぶうらぶらということになりましようわい。」

こんな話を聞いては、ほかの二人が一口のらないわけがありません。そこで、悪人牧師は二人に、これこれしかじかとちえをつけました。さあ、こうなればこの三人、ジェイコブだんなをだまして、ぶた一頭をまきあげるなんて朝めし前のことでしよう。

さて、いよいよそのよく朝、ジェイコブだんなはぶたの片方のあと足に一本のつなを

つけて、せきたてせきたて市場にむかいました。

町にはいって、まずさいしょに出会ったのは牧師さん。

「おやおや、ジェイコブさんじゃないか。元氣かね。」牧師は声をかけてきました。「ところで、こりやまた、どうどうたるいぬをつれて、いったいぜんたい、おまえさん、どこへいきなさるおつもりだね。」

「いぬだって？」とジェイコブさん、目をさらのようにまろくしていいました。「いぬだって？　なんてこった。よう見てください。これほどのぶたは、まあず、この町へきたことなどありませんだから。」

「なんだって？」牧師がいました。「このわたしが両方の目と耳でちゃんといぬだとたしかめたのに、おまえさん、これをぶただといいなさるおつもりかね。」

「ああ、そうともさ。ぶたに決まってるだから。」

「なにをおっしゃる？　いぬなのに。」

「ぶたですだ！」

「いぬだったら！」

「ぶただってば！」

「いぬ！」



